

日本の医学雑誌の現状

Some Problems of Medical Journals in Japan

上 田 修 一  
*Shuichi Ueda*

松 村 多 美 子  
*Tamiko Matsumura*

緑 川 信 之  
*Nobuyuki Midorikawa*

*Résumé*

There are about 1,000 medical journals published in Japan. The total number of articles published by these journals is estimated to be about 59,000 by a mail survey of Japanese medical journal editors, and 9,000 articles are appeared in foreign medical journals. From the survey, four major problems can be identified: (1) More than 60% of articles published by Japanese medical journals are written by Japanese language, (2) The average rate of rejection in the Japanese journals is very low, (3) As the route of circulation is not open, so foreign researchers cannot access most of Japanese medical journals, (4) Only a few journals are edited by the professional editors.

As the most of Japanese medical journals have not foreign authors and readers, so these journals are merely domestic medical communication media. Japanese medical journals that circulated among foreign researchers are estimated only 60 titles. It is a undeniable fact that numbers of manuscripts reported the results of current research by Japanese researcher would be submitted to foreign medical journals.

- I. はじめに
- II. 日本の医学雑誌の現状
  - A. 日本国内で発表される医学論文
  - B. 編 集

上田修一：慶應義塾大学文学部助教授，東京都港区三田 2-15-45

Shuichi Ueda: Associate Professor, School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

松村多美子：図書館情報大学図書館情報学部教授，茨城県つくば市春日 1-2

Tamiko Matsumura: Professor, University of Library and Information Science, 1-2, Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki.

緑川信之：図書館情報大学図書館情報学部助教授，茨城県つくば市春日 1-2

Nobuyuki Midorikawa: Associate Professor, University of Library and Information Science, 1-2, Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki.

## 日本の医学雑誌の現状

### C. 頒布

### III. 日本の医学雑誌の構造と特色

#### A. 日本の医学分野の学術雑誌

#### B. 日本の医学雑誌の特色

### IV. 国外への流通

#### A. 論文の言語からみた医学雑誌

#### B. 国外流通への配慮

### V. 結論

## I. はじめに

学術雑誌は学術論文を掲載し、研究成果の公表・伝達の機能を果たすという点で共通の機能を持っているはずであるが、分野別あるいは国別にみれば、その性格に相違があると考えられる。たとえば、日本の学術雑誌については一般に、使用言語が多言語であるという面から、また大学や研究機関の機関誌が多いという面から、欧米で刊行されている学術雑誌とは異なる環境に置かれているとみなすことが可能である。本稿では、医学分野を対象とした場合に日本の雑誌にどのような特色があるのかについて検討する。

最初に日本の医学雑誌の全体像について述べる。日本の医学雑誌についてこれまでいくつかの調査がなされているが、これらの多くは、個々の雑誌の特色を調べたり、コアジャーナルを調査したものである。しかし、日本で生産される論文数やその言語別の内訳、雑誌数や掲載される論文数、編集委員会の状況、刊行までのタイムラグなどの基礎データはよく判っていない。こうした基礎的なデータは、今回のように医学雑誌を検討する際にだけでなく、たとえば医学情報の流通のため様々な情報サービスを策定する上で不可欠のものである。そこで、最初に、書誌的なデータと郵送調査で得られた結果をもとにして、日本の医学雑誌と医学論文の量的、構造的把握を試みることにする。

次に、主として国外への流通という側面から日本の医学雑誌が持つ特色および問題点を明らかにする。

なおここでいう「日本の雑誌」とは国内に編集機関のある雑誌のことである。

本稿では、日本の医学雑誌の編集の実状を知るために「科学情報の国際化を考える会」（事務局：学会誌刊行センター内）が1986年に行なった医学・生物学雑誌の編集担当者を対象とした郵送調査の結果を使用する。

この調査の対象となった医学雑誌は、日本の代表的な医学抄録誌と考えられる「医学中央雑誌」の収録誌である。つまり、「医学中央雑誌」の収録範囲を「医学」分野とみなしており、分野の範囲について特に厳密な定義を行なっているわけではない。「医学中央雑誌 収載誌目録 1985-1986」に収録されているのは、1,779誌であるが、このリストを検討し、以下の種類の雑誌を対象から除いている。

- a. 廃刊誌および休刊誌
- b. 新聞
- c. 医科、歯科、薬科、看護の大学および学部が発行するもの以外の紀要  
(例：体育大学紀要、教養学部紀要)
- d. 都道府県、市町村の衛生研究所報告

「日本科学技術関係 逐次 刊行物目録 1984」（国立国会図書館編集・発行）は、各収録雑誌の収録記事の性格について、原著論文、総説・展望・解説、ニュース・海外情報、抄録、データ・統計、通俗科学記事、という区分を与えている。そこで同目録を参照し、原著論文を含まない雑誌を除いた。この結果、調査対象誌は、1,032誌となった。

調査項目は大きく四つの部分からなる。

第一は、投稿原稿や掲載論文の数、および言語、また投稿資格などの主として投稿に関わるものである。

第二は、編集委員会の役割や人数、受理までの日数、補助の有無、発行部数などの編集・発行に関わるものである。

第三は投稿論文の言語上の問題にどう対処しているかに関するものである。

第四は、編集上の問題に関しての設問である。

調査対象雑誌の編集部に対して、こうした質問を記載した質問票を1986年6月に送付し、7月に回収した。565票を回収し、561誌の編集者から有効回答が得られてい

第1表 刊行機関別雑誌数と掲載論文数

編集・刊行機関	誌数	比率	回答数	平均論文数			平均発行部数		
				投稿	掲載	英語	総数	国外	国外比率
学 協 会	238誌	42.2%	199誌	92件	79件	28件	2,862部	119部	4.2%
大 学	155	27.5	127	34	34	8	936	115	12.3
企 業	13	2.3	3	—	9	5	2,383	6	0.3
国公立研究機関	28	5.0	22	22	19	9	982	170	17.3
出 版 社	50	8.9	34	112	85	3	6,071	68	1.2
その他(病院等)	80	14.2	58	46	37	1	1,297	29	2.2
計	564	100.0	443	66	58	16	2,254	103	4.6

る、回答率は、54.7%である。

編集機関別の回答数と論文数、発行部数などの概要を第1表に示した。

## II. 日本の医学雑誌の現状

まず、調査結果と補足的な調査をもとに日本の医学雑誌の現状を記述してみよう。

### A. 日本国内で発表される医学論文

論文数について回答の得られた雑誌443誌に過去1年間に投稿された原稿あるいは依頼によって執筆された原稿の数は、29,318件であり、そのうち25,480件が掲載された。この443誌の調査結果は、全体の約43%を反映しているとみなせるため、全医学雑誌が受け付けた論文数は、約6.8万件と推定することができる。さらに欧米の医学雑誌については網羅性が高いと考えられる *Excerpta Medica* によって調査してみると、1985年に外国の雑誌に発表された日本からの論文は約9,000件であった。実際には、査読によって掲載を拒絶された論文も多いと考えられるので、外国の雑誌に投稿された論文はこれよりも多い。山崎茂明によれば「世界を代表する医学雑誌」の平均却下率は47.1%と推定されるので、仮に国外雑誌の採用率を50%と考えると、海外へ投稿される論文数は1.8万件となる。したがって、国内で生産される医学論文は8.5万件以上であり、その2割以上は国外の雑誌に投稿されている。

また、掲載される論文数は、国内雑誌では約5.9万件、国外雑誌を含めると約6.8万件であり、国外の雑誌には全体の13%が掲載されている。日本国内で刊行される医学雑誌は、1誌当たり年間に平均して66.1論文を受付け、57.5論文を掲載している。1号あたり平均して13

件を掲載している。

調査の結果では、日本語の投稿原稿は20,947件であり、これは全体の71.4%を占め、英語は8,247件(28.1%)である。その他の言語は、122件と極めて少ない。すなわち日本では、国内の雑誌に投稿される原稿の7割強が日本語で書かれており、英語の比率は3割弱ということになる。

なお、561誌の中で外国語の論文を掲載しているのは224誌であり、これらの雑誌は7,092件を掲載している。掲載論文が全て英語で、日本語の論文を掲載しない雑誌は67誌であるが、その大部分(64誌)は英語の論文のみを掲載している。

日本語・英語以外の言語の論文ではフランス語が他の言語よりも多く使われている。

全掲載論文が投稿された論文からなると回答している雑誌は244誌(44.6%)であり、依頼論文だけからなっている雑誌も33誌(6.0%)存在する。残りは、投稿論文と依頼論文の双方を掲載している。大学と国公立研究機関が編集発行している雑誌の多く(それぞれ64.4%、75.9%)は、投稿論文のみであると回答している。出版社が編集しているものは、投稿論文と依頼論文の両方を掲載するものが多く(81.0%)、学協会誌も同様の傾向(58.8%)がある。

なお、投稿論文の投稿資格を学会の会員などに制限している雑誌は、全体の74.6%を占めている。つまり残りの約25%の雑誌には誰でも投稿できることになる。編集機関が出版社である雑誌では、資格制限をしているものが19.4%と極めて少なくなっている。

### B. 編集

投稿受付から受理までの日数は、30日から40日が最

日本の医学雑誌の現状

も多く(19.1%)、次は10日から20日である(10.0%)であるが、これは刊行頻度によって変わってくる。

受理されるまでの日数が長くなるのは、論文の内容に問題があり(66.4%)、著者による書き直しに時間のかかった場合(69.9%)である。つまり、受理までに時間がかかる原因は、第一に著者の側にある。

査読に時間がかかることを問題としているのは、約4割(39.2%)であり、これもかなり高い比率である。また、編集委員会側の問題として、編集委員会の開催頻度をあげていたものは全体の3分の1(34.2%)である。

雑誌の21.7%は出版補助を受けている。大学が刊行する雑誌は補助を受けている比率が高い(36.8%)。一方企業と出版社の雑誌は全く補助を受けていない。

補助は、大学や国公立研究機関の場合は親機関から得ており、学協会は文部省の成果刊行費の補助を得ている。

有効回答561誌の中の519誌から編集委員会について

回答があったので、少なくとも92%の雑誌に編集委員会が設けられているとみなすことができる。これら編集委員会は、平均して10.9名からなり、最高は99名であった。

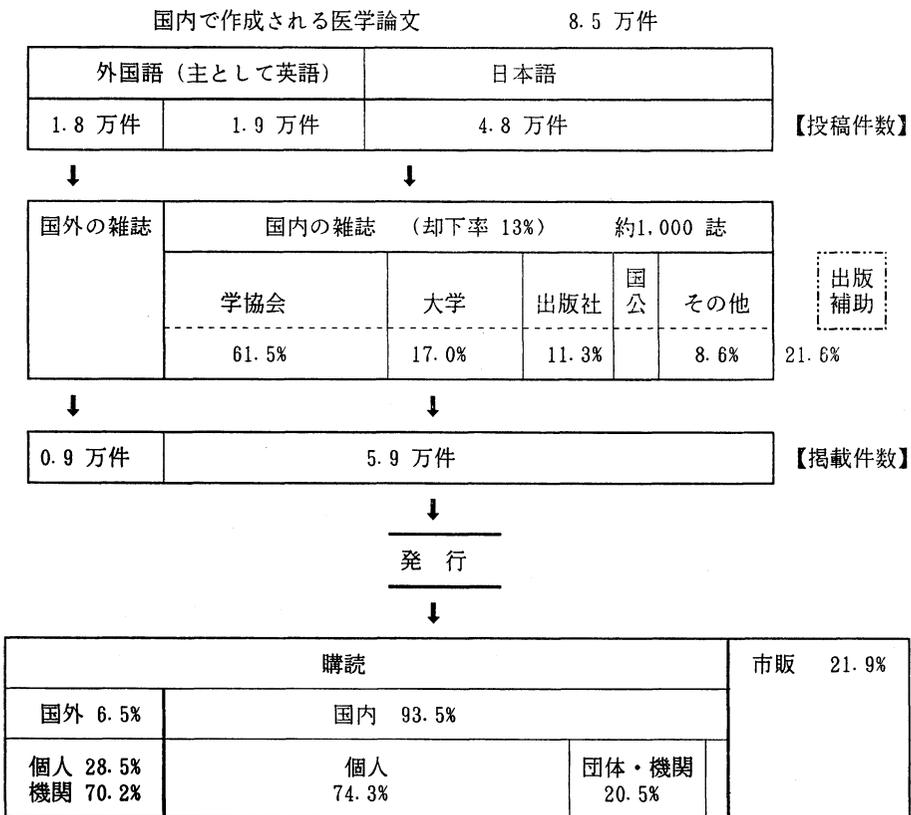
編集委員会の役割としては、

- 1. 論文の掲載順序の決定 372誌 (76.6%)
- 2. 論文採否の最終判断 363 (60.9)
- 3. 論文の審査 300 (57.8)
- 4. 依頼論文のテーマや執筆者の決定 244 (47.0)

が主なものである。

学協会や大学で刊行する雑誌の場合にはこの順序は変わらないが、出版社が刊行する雑誌では、編集委員会の主な役割は依頼論文のテーマや執筆者を決めることである。

他に、査読者の決定、編集方針の決定、新企画の立案、投稿規定の作成と改訂などがあり、この中で査読者の決定は編集委員会の主要な業務となっている。



第1図 日本の医学論文と医学雑誌の流れ

編集の実務担当者には、

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1. 雑誌の扱う分野の専門知識 | 361 誌 (69.4%) |
| 2. 実務能力         | 303 (58.3)    |
| 3. 編集の経験        | 221 (42.5)    |

が求められている。つまり日本の医学雑誌の編集においては編集の経験よりも対象分野の専門知識が重視される傾向がある。

著作権については、全体に関心が低い。論文の著作権の帰属を表示している雑誌は、84 誌 (15.8%) にすぎなかった。掲載論文が複写されることによる影響についても、全体では 338 誌 (69.5%) が、「あまり影響がない」としており、「影響している」(84 誌, 17.3%) とするものは少なかった。大学や国公立研究機関では影響を認めていないが、出版社は「影響がある」とするものが過半数の 22 誌 (56.4%) となっており、複写に対する認識の差は大きい。

### C. 頒布

市販されている雑誌は、全体で 122 誌 (21.9%) であるが、これは学協会誌の 25.9% が市販されていることが大きく影響している。ほかに出版社が刊行する雑誌の 95.2% が市販されている以外は、大学 (7.1%)、国公立研究機関 (6.9%) とともに市販しているものは極めて少ない。したがって、日本の医学雑誌は一般の流通経路にはのっておらず、入手しにくいといえる。

発行部数について回答のあった 553 誌は、総計で約 137 万部を発行している。5,000 部以上発行している雑誌が 55 誌あり、その中では学協会誌が 27 誌と半数を占め、ついで出版社の刊行する雑誌が 18 誌で、大学のものは 1 誌にすぎない。

また、発行される雑誌は国内の場合、その 4 分の 3 は個人購読者にわたっている。機関に配布されるのは約 2 割である。国外に頒布されている総部数は、約 52,000 部で、全体の 3.8% にすぎない。国外では個人購読者 (28.5%) よりも機関購読者 (70.2%) の方が多い。

以上の主要な結果を図示すると第 1 図のようになる。

## III. 日本の医学雑誌の構造と特色

### A. 日本の医学分野の学術雑誌

国内の医学研究者が 1 年間に発表する論文は、前述のように約 6.8 万件と推定される。医学中央雑誌の 1985 年の収録件数は約 20 万件であり、今回の推定の 3 倍以上

であるが、この中には学会抄録が含まれている。科学技術庁の委託で三菱総合研究所が行なった調査によれば、1982 年の日本の医学論文数は 59,800 件と見積られている<sup>2)</sup>が、今回の結果とかなり近い数値であるといえよう。

国内の他の分野や他の国での同様な見積りが存在しないため比較をしてみることはできないが、かなり大量の論文が生産されているといえることができる。

この調査対象には、企業の広報誌や大学、病院の機関誌など種々のタイプの雑誌が含まれており、全てを学術雑誌とみなすことはできない。このような場合に、編集・刊行機関によって学術雑誌を決定することが行なわれがちである。しかし、学会といっても、たとえば大学の学部同窓会や地域の医師会が学会組織となり学会誌を発行している事例は数多い。また、大学紀要が主要な学術雑誌となっている場合もある。そのため、少なくとも医学分野では、学会が刊行する雑誌を全て学術雑誌としたり、出版社の発行する雑誌を除いたりするような単純な分類はできない。

学術雑誌の機能は、専門家により評価を受けた研究成果の早期配布にあると考えることができよう。こうした場合にレフリー制をとり、一定の刊行回数を満たすことが必要になる。

調査結果から全体の論文却下率を求めると、13.0% となる。今回の調査では、レフリー制の採否を尋ねてはならず、そのためこの結果はレフリー制のある雑誌だけを集計したものではないにもかかわらず、山崎茂明のレフリー制のある医学雑誌 65 誌を調査した平均却下率 13.3%<sup>1)</sup>とほぼ一致する結果となっている。

M. Gordon は、英国の学術雑誌のレフリー制を調査した結果、数学分野とらび生物医学分野の雑誌の却下率は高いと述べている<sup>3)</sup>が、日本ではかなり低いことになる。

今回の調査では投稿論文数と掲載論文数を尋ねているが、掲載論文数が投稿論文数よりも少ない雑誌は実際にレフリー制を採っている可能性があるともみなすことができる。総数は 223 誌で、却下率は次のようになる。

却下率	雑誌数
10% 未満	78 誌
10% 以上 20% 未満	58
20% 30%	25
30% 40%	35
40% 50%	7
50% 以上	20

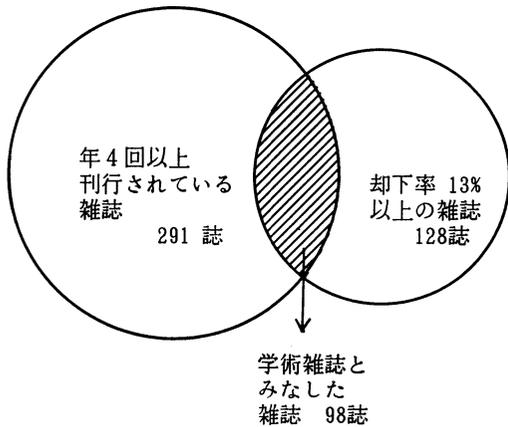
日本の医学雑誌の現状

投稿論文と掲載論文の差が数件の場合は、単に未掲載の投稿論文が残っている可能性もある。そこで、平均却下率以上の却下率を示している雑誌をレフリー制を採用していると考えたことにする。この 13.0% 以上の却下率を維持している雑誌を選ぶと 128 誌となる。

次に刊行回数であるが、速報性の面からいえば、年 4 回以上すなわち季刊以上の刊行回数が必要である。この年 4 回以上の刊行回数を持つものは 291 誌であり、過半数に達しているため、これを基準とする。

そして、レフリー制と年 4 回以上の刊行回数という条件を満たす雑誌を選ぶと 98 誌となった(第 2 図)。この 98 誌の編集刊行機関別の内訳と言語 それに頒布状況は第 2 表のようになる。

上記のような基準を設けても、学会誌のみが残るわけではない。全体としては学協会誌の比率が高まるが、むしろ出版社の刊行する雑誌の中の 4 割が含まれているこ



第 2 図 「学術雑誌」 98 誌の範囲

とに注目すべきであろう。繰り返して述べるが、編集機関別に分類することは、雑誌を機能的にみる時にはほとんど意味がない。

さて、これらの 98 誌は、全体で 11,283 件の投稿論文を受付け、7,655 件を掲載し、3,628 件を掲載しなかった。前述のように投稿論文の総数は 29,318 件、掲載論文総数は 25,480 件であり、3,838 件が採用されなかった。これら却下率の高い 98 誌(全体の 17% に当たる)は、投稿の 4 割、掲載論文の 3 割を扱っており、未採用論文の 95% を却下していることになる。

第 2 表に主要な特性を示したが、ここで日本の医学分野の学術雑誌とみなした雑誌は、大きく三種類に分けることができる。

一つは、英語を主体とし、国外に向けた雑誌である(タイプ I)。この 98 誌の中で英語の論文しか掲載しない雑誌が 25 誌あり、当然のことではあるが、誌名は大多数が英語かラテン語である。このグループは、学会誌と大学医学部が刊行する英文誌からなる。これらの雑誌の発行部数は平均して約 2,500 部と少ないが、国外にはその中の 400 部近くが頒布されている。

二番目のグループは、日本語の論文のみからなる 45 誌である(タイプ II)。これらの雑誌を編集・刊行しているのは主として学協会と出版社である。一般に刊行頻度は高く、大部数であるが、国外にはほとんど頒布されていない。

そして両者の間に日本語と英語の両方の論文からなる 28 誌がある(タイプ III)。これは上記の二つのタイプの中間的な性格を持っている。タイプ III の雑誌には英語の論文が掲載されている。しかし、これらの雑誌の全掲載論文に占める日本語の論文の比率は 2 割程度である。

第 2 表 「学術雑誌」 98 誌の刊行機関別雑誌数と論文数

編集・刊行機関	誌数		平均論文数				平均発行部数		
	誌数	比率	投稿	掲載	却下率	英語	総数	国外	国外比率
学協会	63誌	64.3%	130件	90件	30.4%	42件	4,793部	196部	4.1%
大学	8	8.2	52	37	30.0	19	798	183	22.9
企業	0								
国公立研究機関	2	2.0	33	26	22.7	19	800	195	24.4
出版社	20	20.4	121	76	37.0	1	7,800	62	0.8
その他(病院等)	5	5.1	46	24	48.1	0	2,496	51	2.0
計	98	100.0	115	78	32.2	30	4,882	160	3.3

## B. 日本の医学雑誌の特色

この 98 誌のような雑誌は、医学分野全体で 230 誌ほど存在すると推測できる。つまり全体の 2 割程度である。日本の医学分野ではこれらの雑誌だけが「学術雑誌」としての評価に耐えうる可能性がある。残りの 800 誌は「学術雑誌」の機能を満たしていない「準学術雑誌」とでも言うべき存在である。

日本の医学雑誌の大多数は、国内での医学論文の流通手段となっている。一応、学術雑誌の形態をとっているものの実態としては制度的に刊行が維持されている雑誌が多い。

このことはいくつかの点から確かめられる。

第一に日本の医学雑誌に掲載される論文の 6 割以上は日本語論文である。一方、英語論文の半数近くは国外の雑誌に投稿されていると推測できる。

第二に却下率の低さは、レフリー制が一種の擬制として維持されているに過ぎないことを推測させる。

第三に国外への頒布を積極的に行っている日本の医学雑誌は極めて少ない。そして国内においてさえ市販しない雑誌が多く、頒布対象は個人が主体であり、一般に入手することは難しい。

第四に、医学雑誌の編集者からの回答に雑誌運営上の問題点として、

専任の編集者がいない	30 誌
投稿原稿が少ない	30 誌

の 2 点が指摘されている。これは、自由記入に記載された回答であるので、実際には同様の問題はかなりの雑誌にあるとみなすことができる。特に大学、研究機関、病院などで刊行されている雑誌では、専任の編集担当者が置かれることは少なく、また積極的な投稿者を獲得することも困難な状態である。

専任の編集者が少なく、研究者が回り持ちで編集を担当し、雑誌の刊行が維持されているのは大きな問題である。パートタイムの編集者と編集委員会によって、学術雑誌を維持することは本来は無理である。現に著作権や複写をはじめとする学術雑誌をめぐる様々な問題について、適切な対応がなされていない。このように日本の医学雑誌に専任編集者が少ないことは、学術雑誌としての機能の維持に疑問を抱かせる。

また、投稿原稿が少ないという指摘は、制度上やむを得ず刊行されている雑誌が多いことを示している。つまり、刊行補助を得ているために刊行せざるをえず、原稿

を集めなければならない。そして、全体に質の高い論文は、海外の雑誌に投稿され、その他の論文は国内の学会誌、出版社の刊行する商業誌に投稿されるため、大学の機関誌などは慢性的な原稿不足になるという構造になっている。

## IV. 国外への流通

### A. 論文の言語からみた医学雑誌

研究成果が国際的に認められるためには、広く通用する言語、現状では英語を使用する必要があるのは自明である。たとえば、J. Maher の調査<sup>4)</sup>によれば、*Index Medicus* に収録されている雑誌論文のうち、英語のものは 1966 年に 53.4% であったのに、1980 年には 72.2% に増加している。これに対して、ドイツ語は 1966 年の 10.9% から 1980 年の 5.8% に、ロシア語は 8.5% から 6.2% に、フランス語は 7.7% から 4.1% に、そして日本語は 3.9% から 2.8% へとそれぞれ減少している。このように、研究報告に英語を利用する傾向が近年ますます強まってきている。

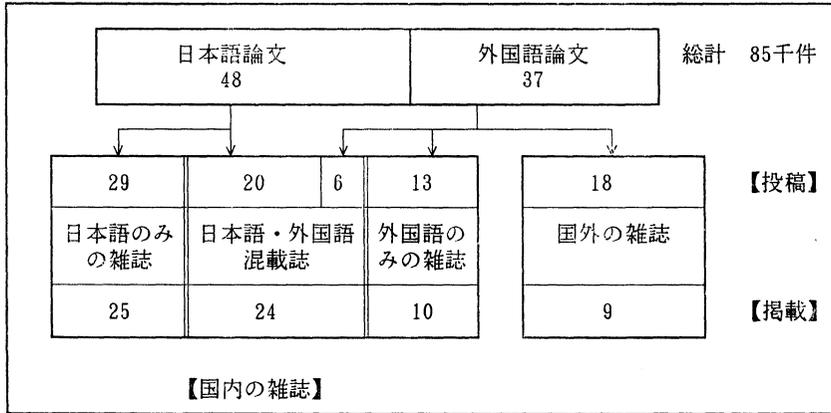
しかし、英語を母国語としない研究者にとってはこの問題は深刻である。1979 年に文部省学術国際局情報図書館課が行なった調査<sup>5)</sup>によると、日本の医学研究者のうち、国際会議などにおいて外国語で研究発表や討議を行うことのできる者は 73.4% であり、かなり高い値を示しているものの、それでも 20% から 30% の人々は外国語での研究発表に率直に困難を表明していることになる。

日本の多くの医学研究者は、米国をはじめとする国外に留学し、外国語を話し書く経験を積むが、現実には母国語ではない言語を完全に修得する例は多くはない。日本人の研究者の大多数が英語よりも日本語で論文を書くことを望んでいることは明らかであろう。しかしながら国外で読まれるためには英語の論文を執筆する必要がある。

英語圏以外の国々でも日本と同様な状況にある。しかも、日本の場合は、日本語で書かれた論文は他の国々で読まれることはほとんど期待できず、一方、英語の論文は国内では一部の研究者以外の一般の日本人は読まないという点でより不利な状況にある。そして、解決策のないまま医学情報の伝達手段として、国外向けと国内向けの二重構造を作り出してきた。

第 3 図は、医学論文の使用言語から投稿から掲載まで

日本の医学雑誌の現状



第3図 言語別の論文数と投稿と掲載の状況（数字は論文数。単位は1,000件）

の状況を整理したものである。すでに述べたように、またこの図で示したように国内の医学雑誌は使用言語の上で次の3種類に分かれる。（〔 〕内は調査で明らかにならなかった雑誌数）

1. 外国語の論文のみを掲載する雑誌（タイプⅠ）  
〔65誌〕
2. 日本語の論文のみを掲載する雑誌（タイプⅡ）  
〔218誌〕
3. 日本語の論文とその他の外国語の論文を掲載する雑誌（タイプⅢ）  
〔160誌〕

そして、日本の研究者が投稿する雑誌は、これらに

4. 国外の雑誌

を加えた4種類となる。

まず、タイプⅢの日本語と外国語の混載誌が国外への伝達手段となりうるかどうかを検討しよう。これらの160誌の掲載論文の中で日本語論文の占める割合は、平均して、79%であった。つまり、外国語論文の比率は平均して2割強であり、この比率が5割を超える雑誌は、わずか10誌にすぎない。これらの雑誌は実質的には日本語論文が主体であり、外国語論文は付随的な存在であるといえる。国外の読者が日本語の論文の中にわずかに含まれる外国語論文を丹念に見つけて読むことは期待しにくい。また、国外への頒布も総発行部数が比較的多いにもかかわらず100部以下程度で国外の定期購読者は40~50名である。したがって、これらの雑誌は国内向けであると考えられる。

次にタイプⅠに属する全てが外国語論文からなる雑誌

であるが、この過半数は大学医学部の英文機関誌である。編集・刊行側は国外への流通を意図していることは間違いなく、国外に頒布される部数も比較的多い。しかし、こうしたいわゆる英文紀要は、少数の例外を除いて、レフリー制をとっていないという問題がある。したがって、実質的に国外で多くの読者を得る可能性があるのは、前述の「学術雑誌」の中のタイプⅠの25誌に限られる。ところがこの25誌にも問題がある。

国際的な流通を考慮するなら常時、外国人からの投稿が求められる。今回の調査の中で、投稿論文の著者にどの程度外国人が含まれているかを質問している。外国人からの投稿の比率が10%以上の雑誌は、25誌の中で10誌にすぎなかった。

このように日本の医学雑誌は外国語の論文を掲載していても、その大多数は国内でしか流通できない性格を持っている。そして、国外の主要な医学雑誌と同等の機能と性質を有する雑誌は極めて少数である。

言い換えれば、日本の医学雑誌は形式的には、国外への流通を考慮して編集されている。しかし、現実には大多数の雑誌は、国外で読まれ、投稿の対象となるような機能と性格を欠いている。

## B. 国外流通への配慮

最後に、日本の医学雑誌が国外への流通に対してどのような努力を払っているのかについて述べることにする。

第一に、論文が日本語であっても、編集機関で外国語への翻訳を行なうという手段がある。あるいは、外国語

の表現上のアドバイスが得られれば有益であろう。

日本人が外国語で掲載を希望する際の対応では、回答の得られた296誌(52.4%)の中で、日本語の原稿も受けつけ、翻訳まで編集側で行う雑誌は5誌(1.7%)にとどまった。また、外国語の論文のみを受けつける場合には、編集側が外国語の表現上の問題に手を入れている雑誌と著者側に委ねる雑誌はいずれも123誌と同数であった。

このように論文の外国語への翻訳などの言語上の問題の解決を編集側に期待するのは困難な状況にある。

第二に論文の本文は日本語であるとしても、英文抄録を付すことによって、国外の読者や索引・抄録誌作成機関に資することは可能である。

まず、抄録を付している雑誌は全体では411誌と多い。抄録の言語について回答のあった292誌の中の約8割は、日本語の論文には英語の抄録を付している。言語に制限はないとするものが17誌あるが、抄録に英語以外の外国語を指定している雑誌はない。

日本語論文に外国語の抄録を付す際に、日本語の抄録を受付け編集側で翻訳するとしている雑誌は308誌中で15誌ある。表現上の問題がある時に編集側で修正するという雑誌は半数の154誌あり、抄録は本文よりも編集側が配慮していることを多少、推察することができる。

## V. 結 論

以上を総合した結果を第3表に示した。

日本には、1千誌を越える医学雑誌があるが、その中で国外の主要医学雑誌と競える、厳密な意味での学術雑誌は数十誌にすぎない。残りの大多数の雑誌は、国外への流通という面からみればその条件を欠いている。この原因として最も大きいのは、繰り返し述べたように言語

の問題から派生している諸問題である。

日本国内で刊行されている医学雑誌に掲載される論文の多くは日本語を用いているが、これらは日本国内の読者しか獲得できない。投稿者も編集者も国外への流通・期待してはいない。また日本の医学雑誌に英語の論文を掲載しても国外で読まれる可能性は低い。

一方では大量の英語論文が国外の雑誌に投稿・掲載されている。国外の雑誌が研究成果の主たる発表の場となっている。

しかし、日本の医学雑誌は言語以外にも多くの問題を抱えている。その一つは、レフリー制を形式的には採用しているとはいえ、実質的にはこれが運用されていると言いがたい雑誌が多いことである。

また、日本の医学雑誌は、編集上でも多くの問題点がある。今回の調査の回答者から判断することができるが、多くの雑誌では専門編集者がおらず、編集を編集委員会の委員が担当している。編集業務は、ボランティアな仕事となってしまっている。これは、専門編集者を雇う費用がないことも原因の一つである。しかし、編集上の問題としてあげられた事項の中に編集の初歩的な問題が多く含まれていることから判断できるように、雑誌編集業務に専門知識と経験を必要とすることがよく理解されていないこと、および雑誌の専門編集者の不足が大きく影響していると考えられる。

こうした現状から、日本の医学雑誌の国外流通を図るために英語の論文をふやしたり、抄録を英文化するだけでは有効な方策とは言えないことが明らかになる。つまり、問題は構造的なものであり、対処的な手段では解決になりえない。おそらく論文の著者自身が国内の雑誌と国外の雑誌を伝達したい内容によって使い分けているのである。

第3表

雑誌の種類	調査結果		推定	
	誌数	掲載論文数	誌数	論文数
総誌数	433誌*1	25,480件	1,032誌	59,000件
レフリー制あり*2	223	17,236	500	40,000
却下率13%以上	128	8,291	300	19,000
年4回以上刊行	98	7,655	230	18,000
英文論文のみを掲載	25	2,639	58	6,000
海外からの投稿が10%以上	10	854	23	2,000

注：\*1 調査結果の中で掲載論文数について回答のあった雑誌数

\*2 内数(以下も同様)

## 日本の医学雑誌の現状

本稿は、既に多くの人々が経験から察知していることを具体的に明らかにした。すなわち国内の医学雑誌は、医学情報の流通手段としては、限られた機能しか果たしていない、つまり、研究成果の国内の研究者向けの伝達手段として位置づけられ、国際的な発表・伝達手段ではないと言える。そして、他の分野でも程度の違いがあるにせよ同様な状況をみることができるであろう。

しかし、こうした結論は、学術雑誌は評価を受けた研究成果の早期配布手段であるという枠組みの中で、編集者を対象とした調査結果から導き出されたものであるにすぎないこともまた事実である。

実際の研究課題はこの先にある。一つは、日本の医学界はなぜこのような構造を作り上げ、発展させてきたのかという点であり、もう一つは、これに関連するが国内でのみ流通する論文と国外で発表される論文の差異はどこにあるのかという点である。いずれも「国際化」と呼ばれている事象と関連する課題である。

さらに、医学分野の場合は医学研究と臨床から成り立っており、医学雑誌には臨床医への医学情報の提供という重要な機能もあることに留意する必要があるであろう。

本稿は前述のように「科学情報の国際化を考える会」が行なった医学雑誌編集部を対象とした調査に多くを負っている。「科学情報の国際化を考える会」のメンバーの方々、特に事務局としてご尽力下さった学会誌刊行センターの近江洋宏氏、渡部正孝氏に深く感謝申し上げます。

- 1) 山崎茂明. わが国の医学・自然科学雑誌のレビューシステム. *Library and Information Science*. No. 20, p. 27-43 (1982).
- 2) 科学技術情報の国際的流通のあり方に関する調査研究報告書. 東京, 三菱総合研究所. 1984, 352 p.
- 3) Gordon, M. A study of the evaluation of research papers by primary journals in the U. K. Leichester, The University, 1978 (BLRDD 5495).
- 4) Mahar, J. The development of English as an international language of medicine. *Applied Linguistics*. Vol. 7, No. 2, p. 206-218 (1986).
- 5) 文部省学術国際局情報図書館課. 我が国における学術研究活動に関する調査結果. *学術月報*. Vol. 33, No. 2, p. 152-171 (1980).